

報 告

第36回国際シーティング・シンポジウム（ISS2020）参加報告

白銀 晓

国立障害者リハビリテーションセンター研究所 福祉機器開発部

本誌でも過去に何回か参加報告されている日本シーティング・シンポジウムのルーツ、International Seating Symposium (ISS) に参加した。36回目の今回は、バンクーバー（カナダ）のWestin Bayshore Vancouver Hotel を会場に、3月3日から6日まで開催され、20カ国以上から約1,000人が参加した。

今回は“Across the Lifespan”をテーマに掲げ、車椅子や移動に関する知識・技術から資金調達の問題、24時間の姿勢ケアまで、関連する幅広い内容を取り上げられた。開会直後のkeynote speech（基調講演）では、トロント大学のGeoff Fernie教授より、“Technology to Overcome the Big Problems of Aging”と題して、人々が高齢化しても家に住み続けられるようにするための支援技術を利用した取り組みが紹介されるなど、一時の介入に留まらない生涯に渡る支援について議論されていた。

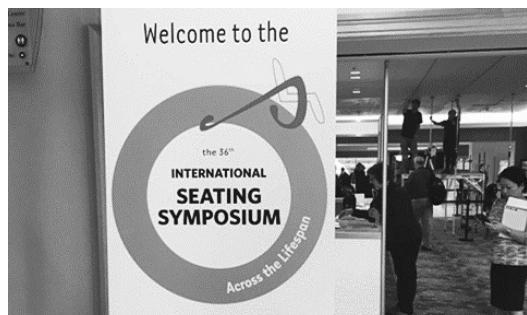


図1 会場入り口の様子（前日受付時）

ISSの一番の特徴は、国内では類を見ないほどの充実した機器展示である。シーティングに関連した70を超える出展者から数多くの実機が展示され、多数のスタッフと参加者でいつも賑わっていた。また、量質ともに充実した講演も特徴的である。その内容

は学識者による理論的・学術的なものだけでなく、現場からの実践的な報告が多く含まれており、各国の施設や地域での具体的な取り組みなどがユーモアを交えて紹介されていて、楽しく聴講できた。

近年、シーティングに対する注目度は益々高まっている。年次開催でないものもあるが、ISSの外、European Seating Symposiumは今年7回目（来年に延期）、Nordic Seating Symposiumは来年8回目、Oceania Seating Symposiumは来年3回目、Latin American Seating Symposiumは昨年5回目と、同種のシンポジウムが各地で開催されるに至っている。機会があれば、これらにも足を延ばしてみたい。



図2 機器展示の様子

最後に、今回の稀な経験を紹介したい。周知の通り、新型コロナウイルスが世界的に広がり、3月11日にWHOはパンデミックを宣言した。不安を抱きつつ出国したが、入国審査は中国湖北省の滞在歴を問う程度で、学会場では手指消毒液はあったがマスク着用者はほぼいなかった。しかし、現地滞在中も感染者は増え続け、3月6日に日本が入国の一時制限措置を発表、ついには帰国への不安が生じた。何とか帰国した後も10日程を経て微熱が発現、潜伏期間が2週間とのことで肝を冷やした。すぐに熱は引いて事なきを得たが、今後の海外活動に懸念を抱かせる大変な学会参加となった。今なお新たな感染が続いていること、罹患者の回復と早期終息が願われる。